

防災情報のためのクロスメディアデータベースの開発と 実践的活用に関するケーススタディー

○浦川 豪・林 春男

1. はじめに

クロスメディアデータベースは、防災領域研究者が幅広い分野の研究を効果的に進めるためのRSII(Research Support Information Infrastructure)と位置づけられる。なお、概要、システム設計・構築に関する詳細は川方他(2004)、久貝他(2004)を参照されたい。本稿では、クロスメディアデータベースのユーザーインターフェイスおよびその機能を述べるとともに、防災研究者・ステークホルダーとしての実践的活用のケーススタディーを行った。

2. ユーザーインターフェイス

クロスメディアデータベースのユーザーインターフェイスは大きく分けて“Cataloger”と“Resource Retriever”の2つのインターフェイスを有する。ユーザ（主にアドミンの権限を持つ者）はData Entry Toolを通してデータ入力する。Search and Query Toolでは、キーワード入力による基礎的な検索の他、詳細検索、さらに12のリソースタイプを指定した検索も可能である。検索結果としてリソースの内容（メタデータの記述内容）が表示されるとともに、リソース間の明示的なリレーションシップの情報を得ることができ、関連するリソースを横断的にたどることができる。また、データベース内に生データがあるものの一部は、リソースそのものの内容を表示することができる。さらに、本データベースは以下に示す検索結果の新しい表示機能をもつ。①リソースの時系列表示が可能であり、キーワード等による検索結果を時系列テンプレートに自動的にプロットすることができる。②GISの機能を用いることによって、フットプリントに基づきリソースを地図空間の中にプロットすることができる。これらの機能は、高度なニーズを持つ研究者にとっては有効な機能であると考えられる。

3. 実践的活用に関するケーススタディー

クロスメディアデータベースの実践的活用に関するケーススタディーを行った。阪神・淡路大

震災の被災者の中にある記憶を形式化した情報として蓄積し、第3者に伝える仕組みを構築する研究内容である。被験者として被災者かつ都市計画者である人物に協力を願い、インタビュー形式で記憶を呼び起こしてもらった。インタビューでは被災者の記憶は個人的な事、公共的な意味を持つこと等が混在した断片的な記憶であった。当時の写真、手帳、地図を用いて、その記憶は呼び起こされた。第3者が暗黙的な記憶を理解するためには、記憶の語り（音声やビデオ）、記憶の中に登場した人物、組織、場所（地図）、関連資料等のマルチタイプのリソースとその内容、相互のリソース間の明示的な関連性が必要とされる。また、語りの中に登場する出来事は、時系列的な整理において震災発生からの時間的推移とともに体系的に理解できる。他の研究においても同様に、研究者の暗黙的な理解や知識、意図を如何に第3者に伝えることができるかということが重要である。このことは、クロスメディアデータベースの仕組みを利用することで実現する。情報検索者はリソースの内容、時期、場所を特定するとともに、リソースに明示的に関連するリソースを把握し、他研究者の意図や知識を理解することができる。さらに筆者は、語りの中で登場した神戸市の土地区画整理事業、再開発事業の話に興味を持ち、その内容が記された報告書や書籍、計画実施箇所、現在の区画と当時の区画、被災状況を把握したいというニーズが生まれた。これらの既存研究やデータは存在しており、特に地理的情報による位置や状況を詳細に把握し、活用したいというニーズである。クロスメディアの拡張的な機能としてGISデータを共有する仕組みを提案した。これは、他研究者の作成したGISデータと分析結果等をそのままダウンロードし活用するものである。クロスメディアの機能とその拡張により研究者は効果的な研究活動を進めるとともに、新たな知識を生み出し、データベースにフィードバックするというサイクルを行い、成長・発展する持続可能性の高いデータベースを構築に参加することとなる。